

【翻 訳】

# 1950年代のコロンビア大学における 理論構築の戦略

ジェームズ・プライス 著  
久 慈 利 武 訳

## 序論

本稿の目的は 1950 年代のコロンビア大学社会学部ファカルティによって提示された理論構築の戦略を記述し批判することにある。そこは当時社会学理論の主要なセンターであった。その卒業生の幾人かは今世紀の後半の重要な理論家になった。

この目的の 5 つの側面をもっと詳しく述べる必要がある。

1) 描写されている戦略は公式にコロンビア大学社会学部によって承認されたものではない。プレゼンテーションを行った教授達はもちろん社会学部によって雇用されていたが、プレゼンテーションは学部によって公認されたものではなかった。状況は個々の学者が別々に自分の見解を提示したものだ、そこには共通のパタンが見られた。

2) 描写されている戦略は必ずしも 1950 年代のコロンビア大学で開発されたものに限らない。本稿の内容を先取りすることになるが、その一部は長い期間にわたって開発されたものである。一例は、パーソンズの一般理論戦略である。様々な戦略の発達を記そうとする試みは一切なされてきていないが、重要なのは各々の提示された時期である。

3) 1950 年代のコロンビア大学に在籍した全員が描写された戦略に完全に同意することはないだろう。本稿の内容を先取りすることになるが、これは機能分析戦略に特に当てはまる。その戦略はある期間にわたって、様々な教授によって、様々な場所で、様々な聴衆に向けて提示されたので、ある種の不一致は避けがたい。

4) 本稿を際立たせるのは、描写された戦略が 1950 年代のコロンビア大学社会学部を特徴づけるという論議である。コロンビア大学の教授はすべての戦略に関わる素材を刊行したが、本稿で描かれた戦略が 1950 年代のコロンビア大学社会学部を特徴づけると論じた単一刊行物一つとして存在しない。本稿の著者は、コロンビア大学院生として自己の 1950 年代のテヌアから描写された戦略を抽出した。

5) 提示された戦略は選好されたアクションコースであった。選好は明示的よりも暗黙の

ものであったが、その戦略が選好されたことは明白であった。

理論は本稿の主題であるが、採用されたタームは明示的に定義されるべきである。理論は命題、概念、仮定、範囲条件からなる<sup>1</sup>。命題は理論のコアであり、二つもしくはそれ以上の概念間の因果関係の言明と見なされる。命題の一例は、連続的に高い値のルーチン化は、おそらく連続的に低い値の職務満足を生み出すだろうという言明である (Kim et al. 1996)。理論は複数の命題を特徴とする。先の例証で、ルーチン化(組織の職務の反復度)と職務満足(従業員が自分の仕事を気に入る度合い)は重要な概念である。前述の命題は、従業員が彼らの職務においてバラエティを重視していると仮定する。この価値がなければ、その命題は妥当しない。範囲条件とは、理論ないし命題が妥当であろう条件を指し示すことである。ルーチン化と職務満足の関係は、フルタイム、終身雇用の従業員にのみ通用する。一時的従業員は命題の範囲の外にある。

本稿は二つのことを想定する。

1) 描かれた戦略は過去に理論開発に益したので、本稿が以下で証明するように、今日の社会学者はそれらを理解することから益するであろう、と想定される。

2) 描かれた戦略は1950年代後の一定期間——かつてのコロンビア社会学徒であった、Peter Blau, James Coleman, Lewis Coser, Alvin Gouldner, Jerald Hage, Elihu Katz, Seymour Lipset, Peter Rossi の作品のなかで——広く使用されてきたように思われるが、戦略の大半は今日の社会学者によっては広く用いられていないことが想定される。

## 10 個の戦略

### (I) 公式化

公式化は議論の構成要素を明示することである。もし述べられている議論が理論であれば、公式化は定義、命題、仮定、範囲条件を明示するであろう。公式化の例証がマーソンの機能分析の論議に含まれている (1968: 73-138)<sup>2</sup>。

マーソンはまず機能分析に関する文献を広汎にレビューし、次いで彼の議論のコアを一つのパラダイムに公式化する。パラダイムは研究者が生産的な機能分析を確保するために行わねばならない区分を提出する。11の区別がパラダイムを構成する。① 機能が帰属させられる項目、② 主観的性向、③ 客観的帰結、④ 機能によって奉仕されるユニット、⑤ 機能的

<sup>1</sup> 本稿の理論観は複数のソースを持っている。Blalock (1961, 1969) は最も重要な影響をもつ。Merton (1968), Cohen (1989) もまた非常に助けになった。

<sup>2</sup> 公式化の他の二つの例示は、社会過程としての友人関係に関する Lazarsfeld/ Merton (1954) の成果と囚人の管理における方針の変化に関する Barton/ Anderson (1961) の論議である。

要請, ⑥ それを通じて機能が遂行されるメカニズム, ⑦ 機能的代替肢, ⑧ 構造コンテキスト, ⑨ 変化, ⑩ 機能分析の妥当性の問題, ⑪ 機能分析のイデオロギー的含意の問題<sup>3</sup>。

公式化の別の面を例証するために、マートンとパーソンズは彼らが自分の著述を公式化する度合いの面で異なっている。例えばマートンの概念は典型的により厳密に定義されているのに対して、パーソンズが概念によって意味するものを確定することは通常大仕事である<sup>4</sup>。第二の違い、命題を見つけ出すのは、パーソンズの著述のなかによりも、マートンの著述のなかにも容易に見いだせる。マートンは彼の命題をイタリック体で表さず、彼のプレゼンテーションのどこかで明示的に述べる。パーソンズは多くの命題を含むが、それらはほとんど常に明示的よりも暗示的である。従って彼の概念同様、著述から命題を抽出することは大きな努力を要する。この違いにも拘わらず、マートンとパーソンズは彼らの基本的概念図式のように、多くの点で類似している。

理論の構成要素は、語、図、数学、物理的客体の4つの異なった仕方で明示されうる。社会学者は典型的には自分の理論を語によって公式化する。概念は定義され、命題は明示的に述べられ、仮定は特定され、範囲条件は指示される。マートンのパラダイムは機能分析の様々な区分を公式化するために語を用いている。自分の理論を口述した後で、社会学者達はしばしば経路図でそれらを公式化する。経路図の初期の使用は、囚人の管理の方針変更に関する McCleery の調査の Barton/Anderson (1961) による公式化である。経済学者と違って、社会学者は自分の理論を数学的に述べないのが一般的である。最後に、社会学者は彼らの理論を物理的客体で表現しようとはめったにしない。社会学者にとっては、DNA の構造を表現するための Watson/ Crick のような物理的客体の使用はない。

公式化の利点は理論の構成要素を明確化することにある。その構成要素の明確な言明とともに理論をテストすることが可能である。明晰性がないと、テストは不可能である。Michels による政党に関する著作 (1915) は公式化の必要を例証する。

民主主義の規定因子に関心を寄せたミヘルスは 1900 年頃のヨーロッパの労働組合と政党がなぜ非民主主義的だったかを説明しようとした。しかしながら、彼の説明の構成要素は不明確であった。例えば彼は決して民主主義を明確に定義しなかった。定義は彼の著作から抽出されうる——システムのメンバーの間の権力の平等——が、その意味内容を明確にして

<sup>3</sup> マートンは機能分析のためのパラダイム以外のパラダイムを提示している。一例は、知識社会学のパラダイム (1968: 510-542)。もう一つの例は、人種間通婚に関するパラダイム (1941)。Kuhn の作品 (1962) はパラダイムの用語の別な用法を含んでいる。

<sup>4</sup> パーソンズ・システムの明晰化の多くは彼の弟子によって与えられている。パーソンズ・システムの二つの非常に役立つ案内は、Johnson (1960), White (1961) である。もちろんマートンはパーソンズの弟子であった。

いない<sup>5</sup>。

公式化に関する最後のコメントである。公式化はオリジナリティを保証しない。テストのために提示された理論は高度に公式化されているかもしれないが、陳腐である。逆に高度にオリジナルな著作は必ずしも公式化されない。例えば、ジンメルの著作は高度に公式化されてはいないが、理論的洞察が豊かである。ジンメルの洞察は集中的分析のあとでようやく姿を現すが、多くの学者の著作は自己のオリジナリティに執着する。Cosserによるジンメルの紛争に関する論考（特に諸命題）の集中的分析（1956）は、この好例である。

## （II） 齊一的概念を使用する一般理論

一般理論には二つの意味がある。社会システムを研究するために齊一的概念（と呼称）の使用。社会現象の研究の際に最も抽象的な水準の实在に焦点を置くこと。第III節で抽象水準を論じるので、本節では齊一性を検討する。

概念も呼称も齊一的でなければならない。一般理論の利点は上記の同時の齊一性がないと実現されないだろう。二人の相互行為し合う個人から社会全体まで、すべての社会システムに同じ概念呼称が用いられる。もちろん一般理論戦略はパーソンズの著作で同定される。

一般理論という呼称は誤称である。パーソンズが提案したのは理論というよりも準拠枠組みである。彼はキャリアの大半を準拠枠組みの開発と様々の社会システムを記述するためにそれがどのように使用されるかを提示することに費やした。一般理論はパーソンズ的アプローチ一般に適用される呼称であるので、本稿は一般理論の呼称を用いることにする。

「社会構造とアノミー」に関するマートンの著作（1968：185-248）は一般理論を例証する。デュルケム『自殺論』（1951）に基づいて、マートンの最初のアノミー論は1938年に現れた。この論文は a substantial literature であるクライナード編『アノミーと逸脱行動：議論と批判』（Clinard 1964）を生み出した。この文献は基本的にはマートンが1938年の論文で開発した準拠枠組みを用いている。マートンはアノミーに関する自分の著作とそれが生み出した系譜を一般理論戦略の具体例と決して呼んだことはない。しかしながら、彼やこの系譜に連なる人々はアノミーを論じるための齊一的準拠枠—— 一般理論戦略の重要な特徴—— を定式化した。

一般理論戦略は方法論にも適用される。Bartonの測定のハンドブック（1961）は社会システムを描写するための齊一的尺度を開発する試みの一例である。Priceの測定のハンドブッ

<sup>5</sup> 高度に公式化されたさらなる事例は、Hageの公理理論の著作（1965）とHopkinsの小集団における影響力の研究（1964）である。Hageの理論構築に関する著作（1972）も理論開発における公式化の使用を例証している。HageもHopkinsもコロンビア大学で訓練を受けた。

ク（1997）<sup>6</sup>はBartonの著作を拡張する近年の試みの一つである。

一般理論戦略の利点はそれが知識の累積の促進を助けることにある。例えば、アノミーという主題を扱うリサーチは、リサーチがマートンによって本来提案された概念を使用するとき、文献のなかに消滅する傾向は少ない。

パーソンズによって実践されたように、一般理論戦略は準拠枠組みの開発を目標にコンバートする。社会学の目的は斉一的準拠枠の構築ではなく、理論の開発にある。準拠枠は理論開発の手段であることが意図されているが、パーソンズのアプローチではゴール（目標）になっている。

### (III) 中範囲理論

中範囲理論戦略は中位水準の抽象性を持つ理論を開発しようとするものである（Merton 1968: 39-72.）。この戦略の一例は個人の適応についてのマートンの類型によって例証される（1968: 185-214.）<sup>7</sup>。

同調、革新、儀礼主義、退却主義、反抗の5つの類型が存在する。「同調」は、社会システムの目標とその目標を達成するためにそれが定める手段の双方に人々が帰依するときに存在する。残りの4類型は逸脱行動の類型を指し、組織に関するデータで例示することができる。

「革新」は社会システム目標への同調状況ではあるものの、それに到達するために定められた手段からの逸脱である（例：ホワイトカラーの犯罪）。「儀礼主義」はシステム目標の拒絶とそれを達成するために提示された手段の受容の組み合わせられたときに生じる。組織における過剰なルール遵守は儀礼主義の例である。「退却主義」はシステム目標と手段の双方の拒絶が存在するときに生じる。例えば、組織にはシステムの成員資格から撤退するが従業員としては継続しているものがある。これらの従業員は退却主義を実践しているのである。物理的には存在するが、これらの従業員はシステムに十全に参加してはいないのである。「反抗」はシステムの目標と手段の双方を否認し、システムが定める目標、手段から逸脱するそれを提案している状況である。反抗の一例は、自分たちの雇用関係から撤退しながら、彼らが実質的な力を行使する労働組合のような、新しい形態の組織権威を提案する従業員の行為である。

一般理論戦略のように、逸脱行為理論を開発しようとするよりむしろ、中範囲戦略は逸脱

<sup>6</sup> Bartonのハンドブックは、個人属性と集合属性の関係に関するLazarsfeld/Menzelの著作（1961）に基づいている。

<sup>7</sup> Barton（1971）は個人の適応についてのマートンの類型の精密化を提示している。



行動の4類型の一つを説明しようとする。先に述べたように、一般理論は概念・呼称の使用の斉一性、できるだけ抽象的な現象に焦点を置くことを意味する。コロンビア大学の社会学部はできるだけ抽象的な水準に焦点を置くという意味の一般理論に好感を持たなかった。これはこの戦略が別個の戦略と見なされなかった理由である。

もちろん、コーエンが『逸脱少年 (1955)』で行ったように、逸脱行動の類型への焦点をさらに絞ることも可能である。彼は非功利的、意地悪な、否定主義的で、気まぐれ、短期の快楽を求める反抗、集団の自立性を強調する反抗に焦点を置いた。彼は、逸脱行動を説明しようとするよりむしろ、反抗の下位類型を説明しようとした。

中範囲理論戦略は中位水準の抽象が様々の度合いをとりうるので、曖昧である。再びマーソンの類型を考察する。逸脱行動の4類型の下位類型(コーエンの反抗の下位類型のような)が提案されるなら、これは中範囲理論戦略を例証する。これは、中範囲理論戦略の意味が常に幾分曖昧であることを意味する。

斉一性を強調する一般理論戦略と中範囲理論を用いる戦略の間に何ら対立は存在しない。ある学者は、(マーソンの逸脱行動の4類型ないしそれらの下位類型のような) a delimited set of data (限定されたデータ集合)を考察するために、概念、呼称の斉一集合(a uniform set of concepts and labels)を使用する。パーソンズとマーソンの違いにも拘わらず(マーソンの方が公式化に多くの力点を置いている)、斉一性と見なされたパーソンズの一般理論とマーソンの中範囲理論の間に固有の対立は一切存在しない。二つの戦略は補完的である。

しかしながら、できる限り抽象水準の高い研究としての一般理論と中範囲理論との間には対立が存在する。マーソンの4類型の一つに焦点を置くことは、逸脱行動のより抽象的な理論を開発することに焦点を置くことではない。一般理論が中範囲理論と対立すると見られるとき、対立は——できるだけ抽象的理論を構築しようとする試み——一般理論観にある。概念、呼称の斉一性という一般理論観は中範囲理論とは補完的なものである。

中範囲理論戦略は管理されるというメリットがある。逸脱行動の説明を開陳するよりも逸脱行動の4類型の一つを説明を開陳する方が容易である。逸脱行動の任意の類型は難しいが、当該の行動が限定されるとき、それはやや容易になる。

中範囲理論戦略に結びついたりスクとは、学者が決してもっと抽象的な現象の説明に動かないことである。これは、プライスの「組織の有効性」に関する作品(1968)で例証される。

バーナードの古典的著作『経営者の役割(1938)』に従って、プライスは「有効性」を組織の目標達成と定義した。「目標達成が高ければ高いほど、有効性も高い」。管理型組織と自発結社という二つの組織類型が区別された。管理型組織はシステムへの奉仕に対して支払われる従業員をスタッフとする。(教会や労働組合の)自発結社はしばしば少数の従業員を持

つが彼らの大半はその奉仕に支払われない。プライスの元々の目的は、組織の有効性の理論を開発することにあった。しかしながら、管理型組織と自発結社の双方に言及する命題を公式化することは非常に困難なことが判明した。それゆえ、プライスは管理型組織にだけ注目することを決断し、管理型組織の有効性の理論を開発しようと努めた。この中範囲の目標は、達成することがより容易で、プライスは管理型組織の有効性に関する31個の命題群を公式化した。

プライスはまた自発結社のための有効性理論を開発しようとした。この理論と管理型組織の有効性理論から、組織の有効性のより抽象的な理論を開発しようとした。しかしながら、管理型組織の有効性のプライス理論から30年が経過したが、自発結社のための有効性理論を開発した者は誰もいない。結果として、組織の有効性のより抽象的な理論はこれまで提示されていない。これは組織の有効性理論が管理型組織の有効性理論の目標よりも社会学の目標に近いために、失敗したのだ。理論が抽象的であるほど、ベターな理論であるが、より抽象的な理論を開発するという骨の折れる任務を先送りすることは容易い。

#### (IV) 理論と方法論の双方に力点を置く

理論と方法論の双方に力点を置くことは1950年代のコロンビア大学社会学部の3局面で明白である。

1) コース（授業、講義）とセミナーが提供された。予想通り、マートンとラザースフェルドはこの領域の主要な人物であった。マートンは理論に関する非常にポピュラーなコースを提供し、ラザースフェルドは測定と数理社会学の指導を提供した。彼ら二人は一緒になって理論と方法論の相互関連性を強調するコースを教えた。他の教員に、理論の歴史を提供するハンス・ゼッターバーグと知識社会学の指導を与えるバーナード・バーバーがいた。1950年代に知識社会学の指導を与えたアメリカの社会学部はほとんどなかった。ハーバート・ハイマンはラザースフェルドに気に入られたタイプの方法論に力点を置きながら、通年の方法論コースを担当した。その社会学部は実質的なコースとセミナーの提供が貧弱であった。例えば1950年代のアメリカ社会学の重要な実質的トピックであった、都市化、社会心理学、人種／民族関係、人口統計学、犯罪学／少年非行など。

2) 入学してくる学生は、理論、方法論、統計学の3つの各々を通年で受講することが要求された。これらの領域のフィールドワークの機会、ラザースフェルドによって設立された併設調査施設、応用社会調査研究所(BASR)で利用できた。BASRはコロンビア大学によって資金提供されなかったが、1950年代のアメリカ社会学部で院生にこのタイプの調査機会を提供したところはほとんどなかった。プログラムの院生達は、理論的に重要なトピックに

関するデータを収集分析する仕方を知っていた。彼らはサンプルを選択し、質問を設計し、指標を構築し、洗練された分析を実施することができた。

3) ファカルティ(教員)は理論と方法論に重要な貢献をした。これらの領域の主要な教員の名前はすでに挙げた。マートン、ラザースフェルド、ハイマン、ゼッターバーグ、バーバー。ゼッターバーグは1950年代に、理論の新生スター(a rising star)と多くの人々によって信じられていたし、彼の『社会学における理論と検証(1954)』は広く持て囃された。方法論への貢献は、データ解析、パネル研究の設計、インタビュー、索引作り、数理社会学のような非統計分野でなされた。

パーソンズとマートンのもう一つの対比はコロンビアが理論と方法論に二重の力点を置くことの一面を例証する。パーソンズの著述は印象深い博学によって伝えられた。彼は重要なものはすべて読んだように思われた。しかしながら、彼は彼の著述を特定の学者と結びつけることはめったになかった。人はパーソンズが言及していることに気づいている学者達の著作を知らなければならない。マートンは非常に異なっている。彼の博識はパーソンズと同じくらい印象深い。マートンの著述は個々の学者への言及で満ちている。マートンの脚注は彼のテキスト(本文)と同じくらい興味を惹く。マートンとパーソンズの違いは、コロンビア大学とハーバード大学の違いである。ハーバード大学は理論と方法論に二重の力点を置かなかった。ハーバード大学は方法論の傑出したファカルティ・メンバー(サミュエル・スタウファー)がいたが、理論に対するパーソンズの注目が学部を支配していた。マートンとラザースフェルドはコロンビア大学で一緒に統治した。

## (V) 機能分析

機能分析は社会行動の帰結に焦点を置く。コロンビア大学の機能分析と一体視されるマートンは、それが追随されれば、研究が生産的となる見込みが高まるパラダイムを提案した。

歴史的には、機能分析は起源の探求に反対して、20世紀に入る辺りに登場した。主要な人物は人類学者のラドクリフ・ブラウンとマリノフスキーである。19世紀の後半、多くの学者は宗教、国家、私有財産の起源に関心を向けた。起源へのこの関心は進化的思考の成長に大いに影響されていた。初期の機能主義者は、これらの現象の起源に関して情報が欠けているが故に、起源の探求は方法論的に欠陥があると信じた。宗教、国家、私有財産が発生したとき科学的考察者は一人も存在しなかった。起源の探求は機能主義者によれば単なる推測の域を出ず、代わりに彼らはそれらの現象の帰結を考察することを提案した。帰結は現在において起こり、厳密なやり方で経験的に考察されうる。推測は一切要求されない。

機能分析の利点は、それがないと見過ごされるかも知れないデータを位置づけることであ



る。二つの事例を考えて見よう。

1) ウェーバーによれば、官僚制の機能は生産性を高めることにあることは周知の通りである。しかしながら、考察者が機能と逆機能を探るべきことをとりわけ述べる彼のパラダイムを使いながら、マートンは官僚制が儀礼主義や過剰同調を促進することを語っている(1968: 249-260.)。また儀礼主義が官僚制からいかにして生じるかをも指摘した。儀礼主義に関するデータは存在するが、官僚制についての学者の見解には含まれなかった。パラダイムの使用がそれらを位置づけるのを助ける。

2) 特に東洋の、大都市の政治マシンはその逆機能、特に汚職の促進の故に批判されて久しい。改革者は都市にとって20世紀初め以来マシンを除去するよう圧力をかけた。それはその逆機能が周知であることを物語る。再び自分のパラダイムを使用しながら、マートンは、政治マシンはその都市の様々な集団に機能を提供していることを語っている(1968: 127-136)。例えば、さもなければ個人の昇進のより伝統的なルートから排除される人々に、それは垂直上昇移動のもう一つのチャンネルを提供する。マシンの腐敗の一部はマシンによって気に入られた候補者に票を投じる移民によき市の職・仕事(good city job)を提供することであった。マシンのこの機能はそのサービスから恩恵を受ける様々な下位集団に周知のことであった。しかしながら、改革者それから学者の一部はマシンを非難することに急であったので、彼らはこれらの機能に気づかなかった。マートンのパラダイムの使用はこれらの機能を視野に入れさせた<sup>8</sup>。

機能分析について二つの最後のコメント。1) 機能分析は理論でなく、むしろ理論を構築する戦略である。マートンが機能理論でなく、機能分析にほとんど常に言及していることを指摘するのは示唆的である。しかしながら、時には彼も機能理論に言及するし、一部の学者は機能分析を理論と見ている(Davis 1948: 364-391.)。事柄は完全には決着していない。しかしながら、本稿では、機能理論は理論のタイプではなく、理論しか存在しない。

2) 社会行動の述べられた帰結は経験的に検証されなければならない。官僚制と政治マシンにとってのマートンによって指摘された帰結は経験的な検証を要求する。これらの指摘はしばしばあたかも堅く確立されたかのように提出されるが、それは正しくない。帰結はほとんど常に仮説設定されている。仮説設定されているものはテストされねばならない<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> マートンは彼の著作の他のところでも機能分析パラダイムの機能的要素と逆機能的要素を使用している。例えば、学者の文献はよく宗教の機能に注目する。しかしながら、マートンは、宗教は検討されるべき逆機能を持つと語っている(1968: 83-84.)。

<sup>9</sup> マートンの機能分析パラダイムの10番目の要素は、機能と逆機能は経験的に検証されねばならないことを述べている(1968: 108)。この要素はマートンを含めて、機能分析を行う学者によって一般に無視されている。

## (VI) 逸脱ケースを取り込む分析の修正

ラザースフェルドの作品に代表されるこの戦略は、逸脱ケースを理論構築の機会と見ている。逸脱ケースを片づけたり、無視する代わりに、この戦略は積極的にそのようなケースを見ようとする。逸脱ケースは部外者であるが、理論の発展を促進する部外者である。一例はリブセット、トロウ、コールマンによる「国際印刷工組合 (ITU)」の研究である<sup>10</sup>。

ITUの研究は、20世紀初頭のヨーロッパの政党と労働組合に関するミヘルスの作品(1915)に基づいている。ミヘルスは民主主義の規定因子に関心があり、彼のリサーチは、彼が研究したヨーロッパの政党と労働組合の一つとして民主主義なものはない、と得心させた。彼がこれらの自発結社のなかに見いだしたのは、権力が長い期間にわたって少数の個人によって行使されていることだった。彼はそれを「寡頭制の鉄則」と呼称した。その事例に特に興味を惹かせたのは、政党と労働組合が民主主義に強いイデオロギー的コミットメントを持っていることであった。民主主義が可能だったなら、ミヘルスはその可能性に疑念を持っていたが、これらの自発的結社のなかには民主主義は存在すべきだ。例えば、企業や官庁が民主主義的でないことを見いだしても珍しくないであろう。ミヘルスの関心は自発結社を超えて広がったが、自発結社が『政党』の焦点であった。

リブセットと仲間は、ITUを逸脱ケースと見た。それは民主的政治システムによって特徴づけられていたから。つまりその労働組合は制度化された2党システム (two-party system) をとっていた。リブセットらの民主主義の定義は先に述べたように、ミヘルスの定義とは異なっていた。この逸脱ケースを説明するために、リブセットらは22個の命題群で説明を提出した(1956: 413-418)。

逸脱ケース分析の利点は、リブセットらのITUの研究のように、理論の発展を促進するかも知れないことにある。ITU部外者として片づけられずに、ポジティブに見られ、理論を開発する機会として利用された。

## (VII) 研究場所の戦略的な選定

マートンの仕事に結びついた戦略である戦略的な研究場所とは、最良の有利さで問題を研究できる場所である (Merton 1963: xi-xiii)。多くの社会学的問題は伝統的に特定の場所で研究されている。例えば、社会化は一般的には家族というセッティングで研究される。社会化を家族というセッティングで自動的に研究するよりもむしろ、戦略的研究場所のアイデアは「社

<sup>10</sup> もうひとつの例はリブセットによる土地国有社会主義の研究(1950)である。ローカル水準より上で、北米の唯一の社会主義政府はカナダ、サスカチュエワンの郡政府、The Cooperative Commonwealth Federationである。後者は要するに、ローカル水準より上で、北米政府のなかで逸脱ケースであった。

会化がもっと有利に研究されうる他の場所が存在する」ことを示唆する。1950年代のコロンビア大学の社会学部と、特にマートンは社会化に興味を持ち、医学部における、医師になることを学習する学生の社会化過程を選択した(Merton 1957)<sup>11</sup>。医学部生の社会化に焦点を置くことは、3つの利点を持つ。

- 1) それは比較的短期間に起こった。家族での子供の社会化ははるかに長い期間で起こる。
- 2) 医学部ではリサーチは馴染みであり、社会学の研究者は容易にリサーチシーンに馴染むことができる。家族というセッティングでは、リサーチは馴染みでなく、社会学研究者は場違いであり、ここでは非常に目立つ。
- 3) 研究者はある程度常に被験者に影響を及ぼすであろう。規模の大きさと分散を有する医学部では、この影響はおそらくあまり大きくないであろう。家族は小規模で、社会学研究者の登場は大きな障害となるであろう。マートンと彼の同僚にとって、医学部での学生-医師の社会化は戦略的研究場所であった。

戦略的研究場所は研究プロセスをより合理的にすることによって、理論の発展を促す。マートンと彼の同僚による医学部生の社会化の選択は高度に合理的行為であった。マートンによって提案された概念である「予期的社会化 (1968: 319-322)」は医学部生の社会化にうまく合致した。医学生は医師になる抱負を持ち、その職業に制度化された価値を採用する。予期的社会化は家族には存在しない。社会化される子供は家族の成員であり、彼らが属する集団文化を採用する。予期的社会化は医学生研究を超えて広い適用可能性を持つ。

古典的社会学者のなかでは、デュルケムが戦略的研究場所の利用に最も接近した。彼によるフランス人の自殺の研究は、この戦略を例証する。自殺を研究する目的は、個人の分析、動機の分析と対照的な今では構造分析と呼称されるものの利点を証明することにあった。自殺は、正確に定義され、タイムリーな話題であり、豊富なデータが入手でき、最も重要な個人行為であるゆえ、戦略的研究場所であった。彼がうまく自殺の構造的説明を進めることができたら、社会学的分析の利点がドラマチックに証明されただろう。『自殺論』は社会学を独立した学問として確立することを助けたが、それが最初に出版されてから、100年以上にわたって依然として出版され続けている。

### (VIII) 属性空間

ラザースフェルドの作品と結びついた「属性空間」概念は類型の論理的可能性を指す。

<sup>11</sup> 戦略的な研究場所のもう一つの例は、パネル法を使いながら、個人行動に対するマス・メディアの影響を研究するために、1940年の大統領選挙キャンペーンを選択したラザースフェルドである (Lazarsfeld/ Berelson/ Gaudet 1944)。

ラザースフェルドの弟子のひとり、バートンはアイデアを例示している<sup>12</sup>。

バートンはデーヴィスによって提案された規範類型（1948：52-58）の属性空間を構築したと述べている。デーヴィスは規範をフォークウェイズ、モーレス、慣習法、実定法の4タイプに区別した。フォークウェイズは義務的であるが、大して重要でない。それらは非公式な社会統制によって執行され、伝統の徐々の成長を通じて発生する。モーレスは非常に重要であり、強い制裁によって執行される。フォークウェイズと同様、モーレスは非公式に執行され、伝統を通じて成長する。慣習法は意図されなかったマナーに起源を持ち、その規範を制定したり変更する立法機関が一切存在しない。実定法は故意の定式化の所産であり、定常的制度手続きを通じて変化に従う。

バートンは、デーヴィスの規範類型は3つの潜在的次元によって特徴づけられる。いかなるものに起源を持つか（伝統 対 組織された制定）、いかに執行されるか（非公式制裁 対 公式制裁）、集団感情の強さ（強い 対 弱い）。これらの3次元が交差分類される時に、属性空間が形成される。

6タイプの規範は、3次元が交差分類される時に形成される属性空間のなかで発生する。上記の規範の4つ（フォークウェイズ、モーレス、慣習法、実定法）は、元々デーヴィスによって提案されたものである。しかしながら、新しい二つのタイプが登場する。両者とも実定法に起源を持つが、非公式に制裁される。新しい規範は、集団感情の強さが異なる。バートンはこの二つの新しいタイプの規範に名称を付けていない。デーヴィスの当初の定式化によって同定されていない社会的実在は、属性空間の使用でもって視野に納められる。このタイプの規範の同定は理論的に意味を持つ。架空の例を考察する。

どちらも強い集団感情を見せるが、一方は公式の執行メカニズムを持ち、他方はそれを欠く——後者はデーヴィスの規範のバートンの属性空間分析によって同定される——、二つのタイプの法律が発生するなら、公式の執行メカニズムを持つ法律は、それが執行される傾向が高いがゆえに、選挙民をよりベターに満足させることであろう。公式の執行メカニズムを欠いた法律はそれか執行されない傾向が高いが故に、それを提案する選挙民にとって満足度は低いであろう。上記の二つのタイプの同定は理論的に有意味である。なぜなら、それらは異なった帰結をもたらすから。属性空間分析はこれら新しい二つのタイプの規範を現出する。ラザースフェルドは属性空間を理論を是正する戦略と見ていないけれども、そのアイデアはこの帰結をもたらす。方法論手続きによって形成されたアイデアは理論的含意を持つ。

---

<sup>12</sup> もうひとつのバートンの属性空間はマートンの個人適応の類型の分析である。

## (IX) 継続

1950年代にコロンビア大で「続き」と呼称されるリサーチを行うことは高度に褒め称えられる行動であった。継続の有名な研究は、『アメリカ兵士の射程と方法の諸研究』（マートン、ラザースフェルド共編1950）と『権威主義人格の射程と方法の諸研究』（クリスティーとヤホダ共編1954）であった。

継続は過去の作品の集中的、批判的研究である。一例はプライスによる組織有効性の研究（1968）によって提供される。プライスは有効性をバーナードが『経営者の役割（1938）』において行ったように、組織の目標達成と定義した。プライスの目標は、管理型組織の有効性理論を開発することにあった。彼はこの理論を開発するために、50個の経験的研究を検討した。

上記の50個の研究は5年かけて大半は小規模な大学院の社会学セミナーで分析された。各年時に、基本的に新しい研究群が分析のために選ばれたが、5年目の終わり近くになって、プライスは結果を執筆するために a leave of absence（研究休暇）を手に入れた。これらの研究の分析は集中的であり、文献の粗略なレビューを避ける自覚的な努力が払われた。

50個の研究は批判的に分析された。この批判は3つの仕方で現れた。

1) プライス分析では、斉一的な分析枠組み（大半はパーソンズから）が用いられた。多くの学問と応用領域をカバーする諸研究は彼らのデータ提示に多数の用語を使用したもので、この斉一性は不可欠であった。

2) 諸研究は理論的かつ方法的質の点でも非常に多様性に富んでいたため、プライスのレビューは良質の作品ほど多くのスペースが充てられた。

3) 分析は31個の命題を生み出し、結果を表示するために何らかの方法が見いだされる必要があった。この提示のために、彼のシステム要件に基づいた修正パーソンズシステムが考案された（Johnson 1960: 51-56）。31個の命題を分類するために5つのカテゴリー（経済システム、政治システムの内部要素、政治システムの外部要素、コントロールシステム、人口/生態学）が用いられた。分析と提示の上記の3ステップの各々に批判的判定が含まれていた。文献は50個の研究の著者達によって提示されたようには要約されなかった。

継続は過去のリサーチが見落とされぬ確率を高める。車輪（wheel）は持続的に再発見される必要はないであろう。現在の学者達は、巨人達が何を書いたかを知らなければ、巨人の肩に乗ることもできなければ、今日のリサーチ研究を創造的に取り上げることもできない。

継続に絡んだ危険も存在する。継続に焦点を置いた過去のリサーチ結果は文献に具体化される。しかしながら、すべての知識が文献に具体化されるわけではない。例えば、プライスは1972年に自発的置換えの理論の開発に着手した（1977）。1970年代初めの置換えリサー



チを支配した経済学者、心理学者によって生み出された文献には、親族は力点が置かれなかった。親族の重要性はその領域の組織従業員によって、また配置換えにカジュアルなコメントをした他の学者達によってプライスに口頭で伝えられた。プライスはこれらの口頭のコメントを無視した。これらのコメントは文献にはないが備忘録に残された。あるタイプのデータは科学の共同体では大して価値が置かれなかった。プライスが彼の自発的置換理論に連の親族変数を系統的に取り込み始めたのは2000年初頭まで待たねばならなかった(2001)。継続は理論の成長にとって基礎的であるが、すべての知識が文献に具体化されるわけではないことを肝に銘じるべきである。口頭の伝統もまた重要である。

### (X) エピデミオロジー戦略

この戦略はある特定の現象についての経験的一般化の構築によって理論の発展を促進しようとするものである。Berelson/Lazarsfeld/McPhee の作品(1954)はこの戦略の先駆けである。彼らは経験的一般化ないし *epidemiology* という用語を用いた。彼らは彼らの議論のなかで理論開発に明示的に言及しなかった。彼らの主要な関心事は *voting statistics* 投票行動の統計分析の品質を保持することであった。彼らの関心事に内在していたのは、保持が究極的に投票行動の説明を可能にするだろうというアイデアであった。もちろん説明は理論である。*epidemiological strategy* はコロンビア戦略のなかで最も開発が遅れたものであった。

経験的一般化とは「二つ以上の変数間の関係の斉一性である (Merton 1967: 149)」。従業員の配置換え文献からの一般化は「配置換え率は低い勤務年数の従業員の間よりも、高い勤務年数の従業員の間の方が低い」という言明である。これらの一般化を設定するにはコントロールが用いられることが重要である。高い勤務年数の従業員は低い勤務年数の従業員よりも多くの点で異なり、「年功」が高い勤務年数の従業員の低い配置換え率に責任があると述べる前に、これらの差異がコントロールされる必要がある。ベレルソンらの投票行動の統計分析(1954: 327-347)は基本的には経験的一般化であった。

*epidemiology* の一例はプライスによる従業員の配置換えに関する作品である<sup>13</sup>。プライスは最初は、配置換えに関する経験的一般化を確定するために文献レビューをした(1977)。一般化は9個のトピック(勤務年数、年齢、雇用水準、ブルーカラー労働者間の技能水準、ブルーカラー労働者/ホワイトカラー労働者、合衆国と他の産業化した諸国、教育、経営のポジション、政府組織/非政府組織)をめぐって配置された。各一般化には人口学変数と考察されている個別現象を指す概念を含んだ。プライスがしたことは、文献のレビューであっ

<sup>13</sup> *epidemiology* のもう一つの例は, Lipset/Lazarsfeld/Barton/Lintz による政治行動の分析(1954)である。

たから、これらの一般化を確定するためにコントロールを使用することはできなかった。

のちの研究で、プライスとキム（1993）は、配置換えに関する経験的一般化を確定するための仕事をした。彼らはテキサスの合衆国空軍病院の1504名の軍の医療職員のサンプルを研究した。留任の意思（配置換えの代理）と11個の人口学変数が相関があった。コントロールのために、OLS回帰分析が用いられた。6個の一般化が提示された。

1. 専門職者は管理職者より空軍に留まる意思は頻度が低い。
2. 学歴が高いほど、空軍に留まる意思は頻度が低い。
3. 大佐以下の将校は空軍、無任所将校よりも、空軍に留まる意思は頻度が高い。
4. 11年の勤務年数までは、留まる意思はある地点まで、ゆっくり上昇するが、それを過ぎると急速に低下する傾向がある。
5. 男性は女性よりも空軍に留まろうとする意思は頻度が少ない。
6. 年配の職員の方が若年の職員よりも空軍に留まろうとする意思は頻度が少ない。

上記の6個の一般化はプライスによる先の文献レビューによって確認された結果と関連する。

epidemiology 戦略はデュルケム『自殺論』によっても用いられてきた。彼は最初自殺に関する文献をレビューし、自殺に関する多数の経験的一般化を開発した。次に彼はこれらの一般化を統合（凝集性、連帯）の概念によって説明しようとした。問題は、デュルケムが一般化の構築によって統合概念をどうやって入手したか触れていない点である。彼が低水準の一般化から統合のようなより抽象的な概念にどのようにして移行できたか示唆が提示されよう<sup>14</sup>。人口統計学変数（教育の量）を考えてみよう。

文献レビューは「学歴の優れた従業員は劣った従業員よりも通常配転率が高い」という一般化の経験的支持を見いだす。Price/Kimによる空軍病院の経験的研究は、この一般化を支持している。教育と相関する変数に関する文献は、デュルケムにとって統合が自殺を説明したやり方である、配置換えを説明できる概念を見つけ出すという目標を持って考察された。本稿の著者（Price）は教育と相関する様々な変数を配置する文献、配置換えの説明を助ける文献をレビューしてきていない。教育は経験的一般化から理論的概念にどのようにして移行できるかの一例として用いられたに過ぎない。

教育文献はレビューされると、一般的な認知能力（多くの人にとっての聡明さ）は教育と相関することを指摘するであろう。「より優れた認知能力を持つ諸個人は劣る認知能力を持

<sup>14</sup> この示唆の初期バージョンはPrice（1994）。epidemiology 戦略の帰納的性格はそれを理論構築の grounded theory approach（Glaser/Strauss 1967）に類似したものにする。グレーザーがコロンビア大学からPh.Dを取得した、そして1950年代に学生であった事実にも拘わらず、grounded theory approachは1950年代のコロンビア大学には提示されなかった。

つ諸個人より学歴が高い」。これは文献レビューのもっともらしい知見である。今やタスクは認知能力と配転の説明を関連づけることである。

一般的な認知能力は職務成績を改善することを物語るデータが存在する (Schmidt 2002)。この改善された職務成績が雇用組織の外部で可視的になると、これは外部のジョブオファーをもたらす。これらのオファーが魅力的であるなら、配転は起こりがちである。今後の研究は配転をうまく説明するため、一般的認知能力、職務成績、可視性の関連を取り込むであろう。教育に関する経験の一般化の構築はデュルケムの統合のような変数をもたらしてきた。

経験の一般化から概念へ移行する他のやり方もおそらくあるであろう。これはほんの一つに過ぎないだろう。この例証は、一般化を確定するためにコントロールを用いる重要性を物語る。教育に関する実質的な文献が存在するし、教育が配置換えと相関することが明らかでないならば、学者はこの文献レビューに自分の資源を投入すべきではない。

## 要約と結論

理論を構築するための10個の戦略が述べられてきた。可能な限りでのもっとも抽象的水準に焦点を置くものとしての一般理論は独自の戦略とはみなされない。なぜならそれはコロンビア大学社会学部によっては選好されなかったから。上記の戦略は1950年代のコロンビアの社会学部の教授達によって提示されたものである。

記述が物語るように、上記の戦略のすべては文献のなかに見いだされる。本稿の独自な点は、上記の戦略は1950年代のコロンビアの社会学部を描写している点である。これまで誰もこの議論を提示した者はいない。議論は一連の別々の出版物のなかでよりもむしろ単一の論文のなかで開示されているので、本稿は戦略を今日の学者達にもより容易に利用できるように、そして願わくは理論の開発を促進することができるように心がけた。提示された戦略への批判は理論の成長を促進することを意図している。

戦略を重要性によってランクづける術は一切存在しない。本稿の著者は最初の二つの戦略——公式化と斉一性としての一般理論——が最も重要であると思っている。理論の発展は明晰性 (clarity) に大いに依存し、公式化が明示性に力点を置くことは、この明晰性に寄与するはずである。今日の行動科学におけるタームの簇生は、考察が複数の行動科学に関連するときには特に、希少資源の大きな誤配分をもたらす。これまでのリサーチの成果の上に組み立てられたものもあまりに少なすぎる。斉一性と見なされる一般理論は現象を記述するために用いられるタームの簇生を減じる、従って他者がこれまでなしてきたことに基づく知識の蓄積を促進するはずである。

本稿は暗黙のうちにコロンビア大学社会学部が理論を構築するための10個の戦略を提示したことを賞賛している。その提示を耳にしたり、読んだりした学生は自分の大学院のトレーニングを有意に向上させたので、コロンビア大学社会学部はこの賞賛に値する。しかしながら、本稿はコロンビア大学社会学部の理論プログラムの系統的評価を試みてきてはいない。そのような評価にはいくつかの否定的コメントも含まれよう。3つのコメントが記すに値する。

1) この学部は理論構築戦略の講義、ゼミを設けることはなかった。その戦略は系統的でない仕方提示された。

2) この学部はこの戦略を決して批判しなかった。その戦略の利点は語られたが、欠点は検討されなかった。

3) この学部はコーエン (Cohen 1989) がのちにスタンフォード大学で提示したような、理論の性質の深い分析を提示することはなかった。

コロンビアの学生はエルネスト・ネーゲルによって実施された科学哲学における理論の性質に関してより多くの知識を獲得していた。この学部の理論プログラムの全般的評価は上記やその他の否定的コメントを記すだろう。その評価はまた上記の肯定的コメント以外の肯定的コメントを記すだろう。ポイントは、本稿が狭いねらいのものであるからそれに基づいて判定されるべきという点である。

## 文献一覧

- Barnard, Chester I.** 1938 *The Functions of the Executive*. Cambridge, MA : Harvard Univ. Press.  
山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳『新訳・経営者の役割』1968 ダイヤモンド社
- Barton, Allen H.** 1955 “The Concept of Property-Space in Social Research.” In : **Paul Lazarsfeld/Morris Rosenberg** (eds.) *Language of Social Research : A Reader in the Methodology of Social Research*. pp. 46-53. Glencoe, IL : Free Press.
- 1961 *Organizational Measurement*. New York : College Entrance Examination Board.
- Barton, Allen H./ Bo Anderson** 1961 “Change in an Organizational System : Formalization of a Qualitative Study.” In : Amitai Etzioni (ed.) *Complex Organizations : A Sociological Reader*. pp. 400-418. New York : Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Berelson, Bernard/Paul Lazarsfeld/William McPhee** 1954 *Voting : A Study of Opinion in a Presidential Campaign*. Chicago, IL : University of Chicago Press.
- Blalock, Hubert M. Jr.** 1961 *Causal Inferences in Non-experimental Research*. Chapel Hill, NC : University of North Carolina Press.
- 1969 *Theory Construction*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall.
- Christie, Richard/Marie Jahoda** (eds.) 1954 *Studies in the Scope and Method of The Authoritarian Personality*. Glencoe, IL : The Free Press.
- Clinard, Marshall** (ed.) 1964 *Anomie and Deviant Behavior : A Discussion and Critique*. Glencoe, IL : The Free Press.

- Cohen, Albert** 1955 *Delinquent Boys*. Glencoe, IL : The Free Press.
- Cohen, Bernard** 1989 *Developing Sociological Knowledge*. Chicago, IL : Nelson-Hall.
- Coser, Lewis** 1956 *The Functions of Social Conflict*. Glencoe, IL : Free Press. 新陸人訳 1978 『社会的闘争の機能』新曜社
- Davis, Kingsley** 1948 *Human Society*. New York : The Macmillan Company.
- Durkheim, Emile** [1897] 1951 *Suicide*, Translated by John A. Spaulding/ George Simpson. Glencoe, IL : Free Press. 宮島喬訳 『自殺論』 1985 中央公論社
- Hage, Jerald** 1963 “An axiomatic theory of organization.” *Administrative Science Quarterly* 10 : 289-319.
- 1972 *Techniques and Problems of Theory Construction in Sociology*. New York : John Wiley and Sons. 小松陽一・野中郁次郎訳 『理論構築の方法』 1978 白桃書房
- Hopkins, Terence K.** 1964 *The Exercise of Influence in Small Groups*. Totowa, NJ : The Bedminster Press.
- Hyman, Herbert** 1955 *Survey Design and Analysis : Principles, Cases, and Procedures*. Glencoe, IL : Free Press.
- Johnson, Harry** 1960 *Sociology : A Systematic Introduction*. New York : Harcourt, Brace and Company.
- Kim, Sang-Wook/ James L. Price/ Charles W. Mueller/ Thomas W. Watson** 1996 “The determinants of career intent among physicians at a U.S. Air Force Hospital.” *Human Relations*. 49 : 947-976.
- Kuhn, Thomas** 1962 *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago : Univ. of Chicago Press. 中山茂訳 『科学革命の構造』 1971 みすず書房
- Lazarsfeld, Paul/ Bernard Berelson/ Hazel Gaudet** 1944 *The People's Choice*. New York : Duell, Sloan and Pearce. 有吉広介監訳 『ピープルズ・チョイス』 1987 芦書房
- Lazarsfeld, Paul/ Robert Merton** 1954 “Friendship as Social Process : A substantive and methodological Analysis.” In : Monroe Bergen/ Theodore Abel/ Charles Page (eds.) *Freedom and Control in Modern Society*. New York : D. Van Nostrand Company, Inc.
- Lazarsfeld, Paul/ Herbert Menzel** 1961 “On the relation between individual and collective properties.” In : Amitai Etzioni (ed.) *Complex Organizations : A Sociological Reader*. pp. 422-440. New York : Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Lipset, Seymour** 1950 *Agrarian Socialism*. Berkley, CA : Univ. of California Press.
- Lipset, Seymour/ Paul Lazarsfeld/ Allen Barton/ Juan Linz** 1954 “The psychology of voting : analysis of political Behavior.” In : Gardner Lindzey (ed.) *Handbook of Social Psychology*. Cambridge, MA : Addison-Wesley.
- Lipset, Seymour/ Martin Trow/ James Coleman** 1956 *Union Democracy : The Internal Politics of International Typographical Union*. Glencoe, IL : Free Press.
- Merton, Robert** 1941 “Intermarriage and the Social Structure.” *Psychiatry* 4 : 361-374.
- (ed.) 1957 *The Student Physician : Introductory Studies in the Sociology of Medical Education*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- 1963 “Forward.” In : Allan Barton (ed.) *Social Organization Under Stress : A Sociological Review of Disaster Studies*. pp. xi-xiii. Washington, DC : National Academy of Sciences-National Research Council.
- 1968 *Social Theory and Social Structure*. New York : Free Press. 森好夫, 中嶋竜太郎, 金沢実訳 『社会理論と社会構造』 1961 みすず書房 (1957年刊の訳)
- Merton, Robert/ Paul Lazarsfeld** (eds.) 1950 *Continuities in Social Research : Studies on the Scope and Method of “The American Soldier”*. Glencoe, IL : Free Press.
- Michels, Robert** 1915 *Political Parties : A Sociological Study of the Oligarchical Tendencies of Modern Democracy*. Translated by Eden Paul/ Ceder Paul. Glencoe, IL : Free Press. 広瀬英



- 彦訳『政党政治の社会学』1975 ダイヤモンド社
- Pope, Whitney** 1976 *Durkheim's Suicide: A Classic Analyzed.* Chicago, IL: Univ. of Chicago Press.
- Price, James** 1968 *Organizational Effectiveness: An Inventory of Propositions.* Homewood, IL: Richard D. Irwin, Inc. 森本三男訳『組織効率』1970 産業能率短大出版部
- 1977 *The Study of Turnover.* Ames, IA: Iowa State Univ. Press.
- Price, James/ Sang-Wook Kim** 1993 “The Relationship between demographic variables and intent to stay among military medical personnel in a U.S. Air Force Hospital.” *Armed Forces and Society* 20: 125-144.
- White, Winston** 1961 *Beyond Conformity.* Glencoe, IL: Free Press.
- Zetterberg, Hans** [1954] 1963 *On Theory and Verification in Sociology.* Stockholm: Amquist & Wicksell, Totowa, NJ: The Bedminster Press. 安積仰也・金丸由雄訳 1973『社会学的思考法』ミネルヴァ書房

## 訳者あとがき

訳出したのは、Price, James L. “Strategies of theory construction at Columbia during the 1950s.” <http://www.uniowa.edu/~soc/docs/tw/pricetw/2003> (August 2003) である。このブログの存在を知ったのは、Stephen Turner “Many Approaches, but Few Arrivals. Merton and the Columbia Model of Theory Construction.” *Philosophy of the Social Sciences*. Vol. 39 No. 2 (2009) の Reference によってであった。

ジェームズ・プライスは1927年生まれ。1950年オハイオ州立大学（産業経営論）を卒業のち、1954年イリノイ大学で修士号（社会学）、1962年コロンビア大学で博士号（社会学）を受ける。1957年から64年まで、オレゴン大学講師、64年から66年までメリーランド大学助教授、66年から2001年（ブログではこうなっている。しかし74歳まで勤務するわけではないのだが）まではアイオワ州立大学准教授、教授。

ブログ掲載は2003年8月となっている。76歳の執筆ということになる。文献一覧の発行、掲載年次に目をやると、50年代のコロンビア理論構築戦略を扱ったものだけに、50, 60年代に集中し、70年代はほんのわずかである。このブログ掲載原稿は2001年アイオワ大学退職を機に執筆されたものと想像される。しかし論文で言及されている文献から推察すれば、80, 90年代以降の文献は彼自身の論文を除く（訳文では省略）とほぼ皆無に等しいことから、70年代にほぼ完成していたものと想像される（ただしあくまでも推測で、それを裏付ける根拠はない）。

このブログ掲載論文を訳出しようと思立った動機は、本誌前号にステフェン・ターナーの「マートンとコロンビアの理論構築モデル」を訳出掲載したことに由来する。この論文はマートン、ラザースフェルドと同期にコロンビア大学社会学講座に関係のあった、ゼッター

バーグ、サイモン、ネーゲル、ハイマンを取り上げ、コロンビア大学学者サークルによる理論構築の考え方が主題であり、マートン、ラザースフェルドという講座専任教員の薫陶を受けた弟子達、ピーター・ブラウ、ジェームズ・コールマン、エリウ・カツツ、セイモア・リップセット、ルイス・コーザー、バーナード・ベレルソン、ガリー・スタイナーの理論構築実践にみられる緩やかな共通性については、具体的には言及していない。ターナーは、プライスがそれをすでに行っているのでそちらを参照するようにと弟子の業績については、ハイマン、ブラウを除いて言及を回避している。そこで、前出のターナーの訳文に興味を持った読者向けに、プライスの論文も訳出しようと思い立ったものである。前者をコロンビア大学社会学講座理論構築モデル第一世代とすれば、後者はその第二世代と呼称できよう。前号の訳者あとがきでは、前者をコロンビア学派理論構築サークル、後者をコロンビア学派理論構築モデルと呼称した。

訳者はプライスの唯一の訳書『組織効率』<sup>15</sup>に目を通したが、目録棚卸しの副題が示すように、ベレルソン／スタイナーの編著『行動科学事典』（1966 誠信書房）のスタイルによく似ている。ゼッターバーグの『社会学的思考法（原題 社会学における理論と検証）』（1973 ミネルヴァ書房）の提唱する命題の目録棚卸しの実践である。50冊の文献から、管理型組織（自生団体型組織と区別される）の組織有効性についての命題を帰納的に抽出したものである。彼の以降の研究も、病院の看護師の配置転換について、同じような命題の棚卸し（命題の帰納的抽出）である。彼は2008年12月11日に死去している。

---

<sup>15</sup>（訳者）森本三男は書名 *Organizational Effectiveness* を組織効率と訳しているが、プライスが見習ったバーナードの『経営者の役割』では、組織目標達成を組織有効性 (*Organizational Effectiveness*)、成員の満足を組織効率性 (*Organizational Efficiency*) と使い分けている。したがって III 節では、森本の訳書に囚われずに、組織有効性という表現を用いた。